慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	立花雄一著 評伝 横山源之助 : 底辺社会・ 文学・ 労働運動
Sub Title	Yuichi Tachibana, Biography of Guennosuke Yokoyama : underworld, literature and labour movement
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.6 (1979. 12) ,p.871(179)- 873(181)
JaLC DOI	10.14991/001.19791201-0179
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19791201-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

立花雄一著『評伝　横山源之助 ——底辺社会・文学・労働運動』

(一)

私が横山源之助の名を知ったのは，三田に来て，今は亡き藤林敬三先生の社会政策の授業か，あるいは先生の研究会（ゼミナール）に出席しはじめた昭和22年頃であったと思う。藤林教授は，片山潜の『日本の労働運動』とならんで，横山源之助の『日本の下層社会』をわれわれに紹介され，「明治文化全集『社会篇』」などにもふれられ，熟読することを熱心に奨められたことを覚えている。しかしその当時は，現実のめまぐるしく変転する政治経済状勢と労働運動のかつてない昂揚にひきつけられ，この明治の古典にたいする関心はいつも心底に蔵しながら，ゆっくりと繙くことができなかった。

ところが，それから4，5年して，片山潜の研究が盛んになり，著作集が発行され，また一時期，同志として活躍した高野房太郎にかんする伝記的研究が，ハイマン・カプリン氏によってまとめられたとき，同時代人として，これらの人々とともに活動し，日本社会史研究に不滅の金字塔をうち樹てた横山源之助の研究がほとんど顧みられないことに，何かしら不自然さと不満とを感じたものであった。

私自身はといえば，研究生活に入った時点で，イギリス労働運働をテーマとして選んだこともあり，横山に興味を抱きながら，彼の時代の労働運動について本格的な研究にとりくむには至らなかった。だが，ハイマン・カプリン氏が，外国人でありながら，忘れられた高野房太郎の業績を発掘し，高野の初期労働運動における役割を再評価することを訴えたことに衝撃をうけるとともに，日本人として恥づかしい気持にも襲われた。それにしても，『日本の下層社会』や『内地雑居後の日本』などの不朽の名著を残した横山源之助とは，一体いかなる人物であったのか，折りにふれて私はこのことを考えつづけてきた。横山は，『内地雑居後の日本』のなかで，イギリスの合同機械工組合にふれ，当時のわが鉄工組合と比較し，前者がいかに強固な組織と財政的基盤をもっているかを語っていることに彼の識見の広さを感得したものであった。しかし，一度，横山源之助その人を知ろうと思って，「解説」を読むと，まことにそのペン・ネームの如くに天涯茫々としてよくわからない。ただ，富山県の出身であること，私生児で不幸な境遇に育ったこと，東京法学院(後の中央大学)の出身であり，ジャーナリストとして異色の存在で，佐久間貞一と親交があったことぐらいしか書かれていない。そして，こうした状況は，今日までほとんどかわらなかった。かつてE．H．ノーマンは，安藤昌益にたいして，「忘れられた思想家」という形容詞を冠して，不幸にも忘却された彼の業績を再評価すべきことを訴えたが，ここにとりあげた立花雄一氏の労作は，不当に無視され，忘れ去られようとしていた明治の記録文学や労働問題研究における偉大な先覚者の一生を，まさに「底辺社会・文学・労働運動」というその全貌把握において，厖大な史料と克明な実地探査を駆使して描き出した力作である。私はこの書物をいま読み終って，最近にない深い感銘をうけた。

(二)

本書を読み終って，感ずることは非常に多いが，その前に，本書は，二段組みで278頁に達する大冊で，その内容は詳細をきわめ，容易に読了を許さないことである。これはたんに一人物の伝記というよりは，明治文学史の一断面をも明らかにするものであり，横山源之助の下層社会にかんする研究が，こうした若々しい明治文学の息吹を浴びて現われたという感想をまず記しておこう。

著者は，本書の序文，「はじめに」で，つぎのようにのべておられる。

> 「ここにしたためるのは，世に埋もれた，日本最初の労働運動者，底辺記録文学の樹立者，横山源之助の生涯と業績である。横山源之助は高野房太郎，片山潜とともに，日本最初の労働運動を展開していた……。
>
> その直前，独特な底辺社会文学を創造し，それを明治文壇文学につきつけ，近代文学史にリアリズム文学の最初の一頁をきりひらいた……」(本書5頁)。

筆者は，横山の文章に接したとき，社会科学の筆致とも異なり，さりとて普通のジャーナリトスとも違う，いわば文学的な香りを強く感じたものであったが，著

者の引用による内田魯庵の評価では，「横山源之助は今で云うプロ文学の先駆者」であったといわれるが，さらに著者が，内田魯庵を引用したつぎの一節を読んで驚嘆した。

「――横山源之助が毎日社に籍を置いたのは半年か一年位だった。が，今でこそ殆んど忘られているが，天涯茫々生の文名は一時相応に売れて，其の貧民窟探求や労働生活の記録は毎日の呼物であった。毎日を去るとブラジルに渡航し，植民事業に計画を立てたらしかったが，ブラジルから帰ると間もなく疾を獲て陋巷に窮死した。無軌道の惑星で終に何らの足跡をも残さなかったが，此の人生の『アジラキニッシド・ピルグリメージ』の遍路修業者も亦数奇伝の一人として後世に伝ふべきであろう」。

同時代人片山潜がアメリカ移民に関心をもっていたことは知っていたが，横山がみずからブラジルに移住したことがあるとは知らなかった。まことに数奇な一生というべきであろう。本書は，以下の内容から成っている。

はじめに
一章　米騒動の浜辺で――生い立ち
二章　二葉亭四迷の門へ――青春・放浪時代
三章　下層社会ルポ作家としての出発
　㈠『毎日新聞』入社
　㈡　前期作品管見
　㈢　樋口一葉との交感――『毎日新聞』時代
　㈣『日本の下層社会』執筆・完成へ
四章　開幕期労働運動と横山源之助
　㈠　労働運動の開幕とともに
　㈡『労働世界』と横山源之助
　㈢　過労にたおれた後
　㈣「貧民研究会」と横山源之助
　㈤『社会叢書』の発刊と『内地雑居後の日本』
五章　過労にたおれる――帰郷
　㈠　魚津山中小川寺へ
　㈡　農商務省『職工事情』調査参加
六章　労働運動への復帰―右派労働運動の旗挙とその潰滅
七章　後半世の横山源之助
　㈠　文筆活動への復帰
　㈡　ブラジル渡航
　㈢　付記―その晩年
八章　後期作品管見――『日本の下層社会』以後
あとがき

以上の目次をみてまず感銘させられることは，横山がいかに広い行動半径をもっていた人物であったか，その精力的な活動に驚かされるであろう。とくに二葉亭四迷との交友すなわち「二葉亭四迷から文学と社会問題意識の影響をつよくうけていくことになる」（27頁）という著者の指摘は，その『浮雲』の主人公文三に自己を擬したこと，そしてやがて文学，宗教から貧民，労働者問題という終生のテーマへとおしひろげられていく過程を意味する。明治24年から27年に至る放浪の時代を経て，こうした境地に辿りつくまでの思想的遍歴を，著者は，二葉亭，そして彼と交友のあった内田魯庵，矢崎鎮四郎，坪内逍遥および幸田露伴とのふれ合いを通じて描いていく。この辺の記述は，明治の社会文学史への貢献ともみなしうるであろう。

しかし何といっても，横山の社会調査研究者，あるいは著者の表現をかりるならば，下層社会ルポ作家としての横山の出発は，明治27年の後半，彼が数え年24歳のときに，島田三郎の推挙で毎日新聞社に入社したときからはじまる。そしてそれから毎日新聞社と自分との間に，何か奇妙にぴったりしないものを感じながら，やがて『日本の下層社会』および『内地雑居後の日本』などに結実すべきさまざまな作品を精力的に発表していくのであるが，しかし，私はこの時期，すなわち明治29年6月頃，横山が樋口一葉と接触する機会があったことを本書によってはじめて知り，彼の人間的魅力，その素朴な人柄を想わずにはいられなかった。「横山は一葉にたいしては，どこまでもしおらしげであり，人間の弱みをさらけ出している。苦労を二人でわけあっていたつもりなのかもしれない。しかし歯車はどことなくかみあっていない」（79頁）と，著者は書いている。しかしかみ合わなかったにせよ，また斎藤緑雨とともに一葉に軽くいなされたにせよ，温い性格の持主であった横山は，彼女の唯一人の理解者に近い存在であったといえるかもしれない。

私は本書を読んで啓発され，あるいははじめて知ったことは少くないが，彼が，農商務省編纂の『職工事情』の執筆者のひとりであったという事実は重要である。桑田熊蔵に彼を紹介した者が高野房太郎であったのは当然であるとしても，彼がこの明治労働問題研究史上に画期的な『職工事情』の執筆者のひとりであることを本書によって知り，衝撃をうけた。何故なら，従来，研究者の間では，『職工事情』は，官庁出版物としては稀にみるヒューマンな叙述といわゆる原生的

労働関係の赤裸々な描写をもって知られ，横山の文名は高かったにもかかわらず，彼の名は『職工事情』とは必ずしも結びつかなかった。この意味で本書は，その間の経緯を明らかにしており，学界にたいする貢献であろう。

これとならんでいまひとつの問題は，彼の労働運動への参加であろう。一般に，横山は，『日本の下層社会』によって社会調査研究者，社会問題研究家としてはひろく知られていたが，しかし高野房太郎や片山潜らの運動，とくに労働組合期成会ならびに鉄工組合の運動にどの程度コミットしたのか，この点は必ずしも充分にふれられなかったように思う。ところが本書によれば，彼は，立場をやや異にするとはいえ，まさに高野や片山にも劣らぬ活動をしていることは明らかである。ただ調査研究のため地方へ出張することが多く，東京を留守にしていたことが多かったため，そうしたことが，労働運動にたいする彼の参加と貢献とを，不当に低く評価させる結果になったのかもしれない。この点について，著者が鉄工組合の機関紙『労働世界』の丹念に検討された努力に敬意を表したい。しかしそれにもかかわらず，明治労働運動史からみると，彼はやはり労働運動家というよりは社会問題研究家，調査者であるという印象は拭いがたい。その理由のひとつとしては，やはり理論的な弱さ，この点を著者が彼の大井憲太郎を中心とする大日本労働団体聯合本部の指導者としての失敗などを通じて指摘している（第6章，本書175頁以下）。

しかし私をおどろかしたのは，横山の南米への渡航の試みである。そして帰国後，二年ほどして，大正4年6月に死んでいる。まことに数奇な生涯というべきであった。

本書を読み終って私は，著者の横山源之助にたいする底知れぬ愛着と敬慕の情に打たれ，久しく味わったことのない深くまた爽快な感動に襲われるを禁じえなかった。ただ社会科学研究者の視点から一言批判をさせて戴くと，今少し簡潔にまとめるべきではなかったろうか。厖大な史料を駆使して奮闘されたのはよくわかるが，引用が不釣合なくらいに長すぎたり，あるいは重複しているところがみられる。もっと簡潔にされたなら，更に説得力のあるものとなったのではないかと思う。〔1979年，創樹社，A5，278頁，3500円〕

飯田　鼎
（経済学部教授）

アルバート・ブレトン，アンソニー・スコット著

『連邦国家の経済憲法』1978年

I

今日，公共的意思決定ないし公共部門の意思決定構造についての研究が，急速な高まりをみせている。これは，国民経済に占める公共部門の質的・量的拡大という現実を反映したものであり，またそれに伴う各種の影響力の増大の一つの結果であるとも言えよう。

このように，現代の公共部門ないし政府は巨大なリヴァイアサンになりつつあると指摘されている。けれども，それに対して，古来から「小政治体の長所を主張する，長期にわたって持続してきた立派な思想傾向がある。古典時代のギリシャ人は，かれらがデモクラシーを支持したか反対したかは別として，善い政治体は領土と人口の点で小規模でなければならない，と主張してきたと思われ」（ダール・タフティ著，内山秀夫訳『規模とデモクラシー』慶應通信，1979年，p. 7），この政治思想はかなり最近まで継続していた。

もちろん，今日では，このようなポリス的国家観は廃れ，国家観も幾多の変遷をとげている。それに伴って，民主主義における公共部門の意思決定構造ないしそのプロセスを探究しようとする試みが，数多く企てられている。たとえば，シュンペーターの啓示を受けたダウンズの政党間競争モデルや，官僚制の特異な行動様式等については様々な角度からの研究が進んでいる。（これらは，現在，ブキャナンやタロックの研究に代表される公共選択 Public Choice と総称されており，本書もこの系譜に位置づけられる）。

ところが，抽象的な地方自治の議論においては，ポリス的世界がやはり有力なモデルとみなされたままのように思われる。つまり，伝統的には，連邦制国家と単一制国家という現実の地方制度に対応して，地方自治を分権的ないし集権的観点から論じ，分権的地方制度をよしとする見方が多いように思われる。つまり，二つの地方制度の相違点が強調されるのである。

けれども，いずれの地方制度をとっているにせよ，両制度には共通点もあるのではないだろうか。たとえば，外交政策や通貨供給の権限はいずれの制度でも中央政府の専任事項である。しかし，かなり多数の政策において，中央と地方はそれぞれに役割分担をして，その実施に努めているのもまた事実である。